

私のネクストステージ

—退職者への質問状—

Vol.46



退職後の夢が 消えた後に見つけた 新たな目標

NPO法人北東北捜索犬チーム 理事長

岩本 良二さん（71歳） 2010年定年退職

【いわもと・りょうじ】元青森県警察職員。現役時代の2008年に「北東北捜索犬協会」を設立。2012年に「NPO法人北東北捜索犬チーム」を立ち上げ、災害救助犬、囑託警察犬、セラピー犬を育成し、実際の現場で育成した犬と一緒に捜索活動やセラピー活動をボランティアで行っている。



愛犬「もみじ」と一緒に

—岩本さんは青森県警察にお勤めだったそうですが、どんな仕事をされていたのですか。

青森県警察の科学捜査研究所の中の法医学科に勤務し、毛髪、骨、血痕、体液などの鑑定を行っていました。

—定年後のライフプランについては、何歳頃から描かれていたのでしょうか？

50歳の時、退職後は仕事の得意分野だった毛髪鑑定の知識と技術を生かして毛髪

鑑定所を開き、民事事件での毛髪の個人を識別（浮気の証明にシーツ付着の毛髪が浮気相手のものか、食品中から発見の毛髪が製造に関わっている人のものかなど、顕微鏡下で検査する仕事を夢に描いていました。

ところが、DNA型鑑定の普及により毛髪鑑定という仕事が必要となり、退職後の夢は在職中に見事に消え去りました。

—その後、どのような経緯から、捜索犬の育成を始めたのですか。

在職中にペットとして飼っていたラブラドルレトリバーの「文太」は、臭いをキャッチし追跡することに関し、とても優秀な犬でした。周りから勧められ、囑託警察犬の試験を受けたところ見事合格し、その後、仲間から「地表の足跡臭だけでなく、災害救助犬の訓練も取り入れて浮遊臭（風と共に流れて来る臭い）も感知できる犬を造ろう」と誘われ、2008年に「北東北捜索犬協会」を設立しました。

というのも、当時、認知症の行方不明者が急増し、大きな社会問題となっていました。認知症の行方不明者は街中や山野を何kmも放浪することが多く、それを追跡するには浮遊臭で捜索できる犬が最適だったのです。

—捜索犬の育成はどうされているのですか。

私どもでは「捜索犬」を「災害救助犬と囑託警察犬の2つの仕事ができる犬」と定義しています。捜索犬になれる犬は、

血統や体の大きさに関係なく、社会性があり、捜索と人が大好きな犬です。そして、災害救助犬と囑託警察犬の両方のライセンスを持つことができる犬です。

災害救助犬としては、原臭（探す人の臭いが付いた靴や枕カバーなど）無しで、人の臭いをキャッチし、さらに現場の状況を判断し、嗅ぎ分けして、行方不明者を発見し、吠えて知らせる能力を持つことが必要です。囑託警察犬としては、行方不明者の原臭を嗅いで、足跡臭や浮遊臭を追跡し、遺留品や行方不明者を発見し、吠えて知らせる能力を持つことが必要です。この2つの条件をクリアするように厳しい訓練を行っています。

新たに捜索犬を目指す犬は我々の機関紙やホームページ等で募集し、見つければハンドラー（指導手）となる飼い主さんとペアで訓練をします。訓練後は、まず囑託警察犬の試験を受験、その後、災害救助犬の試験も受験してもらいます。両方の試験に合格できた犬はこれまで7頭いて、現在、4頭が捜索犬を目指しています。

育成以外にも、災害救助犬や囑託警察犬の必要性について知ってもらうため、講演会や機関誌、ホームページ等で広報活動を行っています。また、セラピー犬も育成し、福祉施設でセラピー活動も行っています。

—2012年にはNPO法人を立ち上げられていますが、その理由は何だったのですか。



訓練所で高所通過の訓練

2016年4月熊本地震時、南阿蘇村高野台地区での捜索活動



コロナ下で行った窓越しのセラピー活動

2021年消防学校で災害救助犬についての講義



2021年9月熱海市土石流災害での捜索活動



2011年3月東日本大震災時、釜石市箱崎町での捜索活動

NPO法人 北東北捜索犬チーム

【メンバー構成】

顧問1名、正会員41名、家族会員14名、賛助会員個人92名、賛助会員団体32団体、サポーター会員8名（いずれも主婦、会社員、教師、医師、弁護士など多彩な職業や企業の方々）。

【所属する犬】

災害救助犬（IRO国際救助犬A段階広域試験合格）2頭、災害救助犬候補犬（IRO国際救助犬適性試験合格）3頭、嘱託警察犬8頭（岩手県警、青森県警）、セラピー犬9頭。

【普段の活動】

〈捜索犬の活動〉

- ・青森県、秋田県、仙台市福住町、青森県内市町村の防災訓練に参加し、いつ災害が発生しても災害救助犬を使って捜索活動が消防、警察、自衛隊と連携してできるよう訓練している。
- ・青森県内の小中学校から訓練士の職業紹介の依頼があれば講話し、捜索犬やセラピー犬のデモンストレーションをする。
- ・青森県内の警察署からの依頼があれば行方不明者の捜索や事件現場で捜索活動。

〈セラピー犬の活動〉

- ・福祉施設などでセラピー犬とふれあってもらおう活動。コロナ下では、施設外部からセラピー犬が窓越しで入所者さんと対面し、心のふれあいを行った。
- ・訓練所のドッグランや公民館で、障害のある子どもたちとセラピー犬がふれあう機会をつくる。

捜索犬、セラピー犬は毎週土日に訓練所に集まって、それぞれ訓練を継続して行き、スキルアップを心がけている。

【災害時の活動】

災害救助犬は災害現場に出動し、消防、警察、自衛隊と連携して、倒壊家屋や瓦礫の下になっている要救助者を捜索。2011年3月東日本大震災、2016年4月熊本地震、2018年9月北海道胆振東部地震、2021年7月静岡県熱海市の土石流災害に出動し、行方不明者の捜索活動を行った。

当初は任意団体として活動していましたが、東日本大震災の時、「災害救助犬のライセンスを有する捜索犬を使ってほしい」と岩手県沿岸部の現地対策本部を回ってお願いしましたが、なかなか使ってもらえませんでした。聞いたこともない団体の犬に人命に関わる捜索を依頼できなかったのでしょうか。それでも、釜石市の箱崎町という小さな町で使ってもらったところ、次々に捜索依頼が来るようになり、野田村や山田町、大槌町などで合計11回、捜索のために出動し、ご遺体の発見に貢献しました。

この時、社会から信頼してもらうにはNPO法人の資格を取得すべきだと痛感し、翌年にNPO法人の資格を取得しました。

——どんな時に、やりがいを感じられますか。

捜索犬が行方不明者を発見し尊い命を救

うことができた時や、セラピー犬とのふれあいにより福祉施設の入所者さんたちが涙して喜んだり、楽しそうにしている笑顔を見ることができた時です。

——活動で大変なことは、何でしょうか？

収益事業を全く行っていないボランティア団体であるため、全ての活動の経費は会員からの会費、寄付、募金で賄っています。不足分は会員が自己負担して活動しなければならず、少ない予算でのやり繰りに大変苦労しています。

——今後やりたいことは、どんなことですか。

捜索犬はおおよそ10歳で引退するため、もっと多くの犬を募集し育成していくことが一つの目標です。そのためには、真に社会に役立ちたい飼い主さんと犬を集めなければと思っています。セラピー犬については、医師と連携して病気で苦しんでいる子供たちとふれあう機会をつくり、子供たちが少しでも治療に専念できるようサポートしていくことが目標です。

——最後に、30代〜50代の読者に向けてメッセージをお願いします。

私が50歳で描いた退職後のライフプランは全く思い通りにいかず、想像すらしていなかった道を歩んでいます。周囲からの勧めがその契機となりました。日頃から仕事以外の仲間づくりと社会奉仕活動に目を向け参加することも大切だと思います。

——お話をいただき、ありがとうございました。